

8705 いま、日本では17万2533台の・・・

いま、日本では17万2533台の汎用コンピュータが稼働している。1945年に世界最初のコンピュータが誕生してから、たったの40年しかたっていない。その拡がり方は、科学と技術がつくり出した「道具」の拡がりの早さとしては希有の出来事である。

なぜ、こんなに拡がったのだろうか。それには、技術上のさまざまな発明、努力があったにしても、根底にあったのは人間たちの要求であった。人間にとってすぐれた「道具」をつくり出そうとする意志が一番の原動力であった。

長尾 真 編著『人工知能—実用化の時代へ』

[許容訳例]

Today in Japan, 172,533 general purpose computers are at work, though only forty years have passed since the computer first came into the world in 1945. The spread of the computer has been uncommonly rapid for a “tool” which science and technology have produced.

Why has the computer spread so quickly? The reason lies partly in a variety of technological discoveries and efforts, yet the basic motive power was human demand. The will to create excellent “tools” for men was the chief impelling force.

[翻訳例]

In Japan today, 172,533 general purpose computers are in operation. A mere forty years have passed since the world’s first computer came into existence in 1945. The spread of the computer has taken place at an unprecedented speed for a “tool” produced by science and technology.

What accounts for this rapid spread? Granted that all kinds of technological creativity and endeavor have gone into it, the basic underlying factor was, nevertheless, human demand. The will to create ever better tools for man to use has been the greatest driving force.

■いま、日本では17万2533台の汎用コンピュータが稼働している。(8705)

★「いま日本では」は Today in Japan, …のほかに In Japan today, … でも構いません。

★「17万2533台の汎用コンピュータ」は 172,533 general purpose computers です。

★「稼働している」は are operating ならいいのですが、work という動詞には、たとえば “This key doesn’t work.”のように、function well [properly]というもう一つの意味があるので、are working でも間違いではないのですが、使わない方がいいでしょう。この「稼働している」とは、すなわち、「稼働状態にある」ということですから、理想的には他の表現、たとえば、are in use とか are in operation の方がいいでしょう。

■1945年に世界最初のコンピュータが誕生してから、たったの40年しかたっていない。(8705)

★「世界最初のコンピュータ」は、そのまま訳すと the world's first computer です。

★「誕生して」は「現われて」ですから came into the world とか came into existence など
が使えます。

★「たったの 40 年しか」は only forty years ですが、もう少し強調したいなら a mere forty
years とすればいいでしょう。なお、a mere forty years を主語にする場合、先頭の a に合わ
せて has にする人もいるでしょうし、最後の years に合わせて have にする人もいます。受
ける動詞は単数でも複数でも構いません。なお、この現象は only forty years でも起
きるでしょう。

★「たっていない」は、ここでは have [has] passed です。

● [から]

「1945 年に世界最初のコンピュータが誕生して [から]、たったの 40 年しかたっていない」
の [から] は since です。日本文と同等の英文にすると A mere forty years have passed
since the world's first computer came into existence in 1945. ですが、… since the computer
was first born in 1945 と書くことも出来ます。この場合 in the world を加えるのはおかしい
です。なお、it を主語にして It is [has been] only [a mere] forty years since…としてもいい
ですが、A mere forty years have passed と違って、日本文の中にかすかに感じられる驚嘆の
情を表現することはできません。

■その拡がり方は、科学と技術がつくり出した「道具」の拡がりの早さとしては希有の出来
事である。(8705)

★「その拡がり方」の「・・・方」は「どんな方法で拡がるか」という意味の「・・・方」
(the way of~)ではなく、「拡がった結果の状態」(the spread of~)を意味しています。です
から the spread of the computer です。なお、工業製品にはよく「the +単数形」(the computer)
を使いますが、「総称複数」(computers)としても構いません。

★「科学と技術」は science and technology です。

★「作り出す」は、ここは工業製品ですから produce でしょう。

★「道具」は a tool でしょう。日本文では引用符(「・・・」)が付いているので、英語でも
a 'tool' とすればいいでしょう。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(科学と技術がつくり出した「道具」)

「科学と技術がつくり出した「道具」」は「連体修飾節(科学と技術がつくり出した)＋
体言(「道具」)」ですから、英語では「名詞(a 'tool')＋関係詞節(which science and technology
have produced)」となります。ただ、間違いではないのですが、この形(which … have
produced)ですと、あまりにも具体的というか説明的な感じになります。つまり、～ have
produced と現在完了(はもともと主観を含ませる表現なので)を表に出すと、どうしても
何か現在に関わっていることにこだわっているような余計なニュアンスが入ってしまいま
す。ここはもっとごく一般的な記述という感じなので a 'tool' produced by science and
technology とする方がいいと思われます。

★「～の拡がりの早さとしては」は、前の部分の「その拡がり方・・・」とダブって饒舌に感じられます。ここは「その広がり方は科学と技術がつくり出した「道具」としては早い・・・」ということですから The spread of the computer has been uncommonly rapid…としていいと思います。あるいは動作動詞を使うなら at an unprecedented speed を使うといいです。

★「～としては」は、ここでは「～にしては；～のわりには」ということですから as～ではなく for～です。

★「希有の出来事である」は工夫が必要です。前で「その拡がり方」を「拡がった結果の状態」と解釈したので、「拡がっている状態」＝「出来事」では日本語としておかしくなります。それで、「出来事」を動詞化して「希有の早さで（そういう状態が）起きた」として、The spread of the computer (since then) has taken place at an unprecedented speed.とすれば、「出来事」と書いた気持ちを生かしてあげることが出来るのではないのでしょうか。

■なぜ、こんなに拡がったのだろうか。(8705)

★「なぜ、こんなに拡がったのだろうか」は、そのまま訳すと Why has it spread in this way? です。これでも構わないと思いますが、ここは拡がりの規模ではなく、拡がった状態になった早さが関心事であると思われます。その意図をくみとると、Why has (the use of) the computer spread so quickly?とか What accounts for this rapid spread?とかでしょう。What accounts for～? は覚えて置いた方がいい言い方です。この account for～というのは‘～の理由を説明する・～の原因となる’ということです。

★「・・・だろうか」ですが、「(なぜ)・・・だろうか」には、普通、one wonders を使いますから、たとえば、Why, one wonders, has the computer spread so quickly?としても立派な英語になりますが、こうすると、何か随想的というか、読者に語りかける感じが出てしまいます。しかし、ここはあくまでも論を次に進める繋ぎの役割をしている文にすぎないと解釈出来るので、one wonders は加えない方がいいと思います。

■それには、技術上のさまざまな発明、努力があつたにしても、根底にあつたのは人間たちの要求であつた。(8705)

★「技術上の」は technological しかないでしょう。

★「さまざまな～」は a variety of～とか all kinds of～でしょう。この場合の all は「あらゆる(種類の)」という意味です。

★「発明、努力」は、そのまま訳すと inventions and efforts とか discoveries and efforts でしょう。これでも間違いではないのですが、どうもしっくりしない感じがします。つまり、inventions とか discoveries というような非常に具体的なことを想定させる言葉に対して efforts があまりにも抽象的で当たり前すぎるというか、スケールが小さくて弱く、アンバランスの感じになってしまいます。それで creativity and endeavor としたいと思います。これは非常に難しい問題です。ランダムハウス英語辞典には「類語」として effort は「普通、ある一つのはっきりした目標を達成するための努力」と、また endeavor は「困難にもめげず、ある崇高な目的を達成するためになされる不断の努力」と説明されていますが、もっと

感覚的には「ラテン語を母体にした言葉」と「そうでない言葉」を組み合わせることの違和感です。英語では「短い言葉」(e.g. get to)はゲルマン系あるいは途中移入されたフランス語の卑俗語(e.g. effort)であり、「長い言葉」(e.g. arrive at)はラテン語から派生したものです。混ぜて使うと変なのです。こういう組み合わせの違和感は、日本語にもあります。「的を射る」であり、「正鵠を得る」ですから「正鵠を射る」「的を得る」は奇妙です。ましてや「おまえ、飯はお済みですか」はおかしいです。

★「～があったにしても」は「～があったけれども」ではなく「～があったことは認めるが・～があったことは当然で[言わずもがなで]あるが」か、あるいは、「～があったにもかかわらず」くらいに解するべきです。前者の解釈の場合は Granted that…が定番の表現ですし、後者の場合には While ~ undoubtedly ~, yet [nevertheless]…という言い方になります。これは、たとえば、While this novel is undoubtedly interesting as a whole, yet personally I feel [I personally, nevertheless, feel] some resistance to parts of it.のように使います。

★「根底にあったのは・・・」は、そのまま the basic motive power とか the basic factor でもいいのですが、やはり「底辺にある」という言葉に含まれている「底を流れている」というニュアンスを出すために underlying を加えて the basic underlying factor とする方がいいです。

★「人間たちの要求」は demand of human brings でも意味はわかりますが、英語としては human demandの方が自然です。非常に難しくなりますが、厳密には、この「～の」は on the part of というフレーズに相当すると思います。このフレーズはだいたい「～による」という意味で、どの前置詞を使ったらよいかわからないような時に使えるフレーズです。こういう表現は一見簡単なようで、native speaker に多く接するか、あるいは多くの物を読んで身につけるかしかないと思います。

●文構造

「それには、技術上のさまざまな発明、努力があったにしても、根底にあったのは・・・」は、「当然、技術上のさまざまな発明、努力があったことは認めるが、根底にあった理由は・・・」ということですから、The reason lies partly in a variety of ~, yet …とか、Granted that there have been all kinds of ~が最も簡単な書き方です。もう少し原文の含み（つまり、人の努力）を生かすとすれば、Granted that all kinds of technological creativity and endeavor have gone into it, …です。go into は put into と同じような意味になりますが、たとえば、I put a lot of effort into this book.とか A lot of time and effort went into this book.のように人間の積極的な意志を含ませることが出来ます。

■人間にとってすぐれた「道具」をつくり出そうとする意志が一番の原動力であった。(8705)

★「人間にとって」は for men (総称複数)でも for man (man は無冠詞単数で総称を表す)でも構いません。

★「すぐれた「道具」」ですが、この「道具」は一般的な意味で使っていると思われますか

ら excellent 'tools' ですが、「つくり出そうとする意志」と続くので、「常によりよい」という感じを込めて ever better tools とする方が原文に即します。また、「人間にとってすぐれた「道具」となっているので ever better tools for man to use とするのが英語的です。

★「つくり出そうとする意志」は the will to create ~です。

★「一番の原動力」は impelling force を使うなら、これは一つのユニットになっていますから the most ではなく the chief ですが、普通、「原動力」という場合は driving force を使います。その場合「一番の」は the greatest です。

★「・・・であった」は、前の「要求であった」もそうですが、過去時制でも現在完了でも構わないのですが、過去時制を使うと、何だか報告文のような感じがします。現在完了を使うことによって、筆者の高揚感というか、何となく話が具体的な感じになっていいと思います。現在完了は、もともと、何らかの感慨・感情を含ませる主観表現なのです。

もう忘れられたと思われる古い本ですが市河三喜著『英文法研究』には、後半にアイルランド英語の文法が纏められていて、大学三年の時ゼミで John Millington Synge の戯曲 *The Playboy of the Western World* を読むことになり、シングの全作品を収めた Everyman Library の作品集を買って読むにあたって市川氏の「アイルランド文法」を通読した。

〔日本文の分析〕

この日本文は事実に基づくエッセーである。英語に訳すに当たって注意すべき点を、英語の論理という観点からみて調べてみよう。

・「いま、日本では 17 万 2533 台の汎用コンピュータが稼働している」であるが、英語にする場合には「いま日本では、・・・」と区切ったほうがいい。「稼働している」であるが、これは現に動いているのであるが、動きそのものを問題にしているのではない。つまり、「動

いているかどうか」ではない。ところが、英語の動作動詞を、日本語の「・・・している」にあわせて進行形にして使うと「動作そのもの」を問題にすることになる。この「稼働している」は「稼働状態にある」という意味である。したがって、できれば、状態動詞を用いて訳す。

・「人間にとってすぐれた「道具」をつくり出そうとする意志」であるが、ここで言っていることは、コンピュータだけにかんすることではなく「道具一般」についての人間の意志であるから、一般てきなこととして処理しなければならない。ところで、「人間にとって」はどこに係るのであろうか。ここは文全体ではなく「道具」に係っていると考えべきで、しかも「人間が使ってみて優れていると思う道具」という意味である。

以上の分析をまとめると、次のようになる

いま日本では、17万2533台の汎用コンピュータ稼働状態にある。1945年に世界最初のコンピュータが現われて以来、たった40年が過たにすぎない。コンピュータの拡がった状態は、科学と技術によってつくり出された「道具」にしては希有な早さで起こった。

なぜこんなに早く拡がったのだろうか。技術上のさまざまな発明、努力は当然のこととして、根底に流れている要素は人間の要求であった。人間が使ってみてすぐれていると思う「道具」をつくりだそうという意志が一番の原動力であった。

〔英文の組み立て方〕

最初の文は「・・・コンピュータ」が主語。動作動詞を用いないで状態を表す。次は「たったの40年」を主語にして‘現在完了+since’の構文を用いる。

「その拡がり方」は「コンピュータの拡がり」を主語にして、「急速に起こった」とする。もちろん現在完了である。

「技術上の・・・にしても」は Granted that... とする。そして the basic underlying factor を主語にたてる。

最後は「人間が使っていいと思う道具を作り出そうという意志」を主語にして、ここも現在完了 has been ～とする。

〔語句〕